

令和五年六月吉日初版作成

人間に復活するべき神聖

高嶋善三郎

## 目次

- 神という存在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 人間に現わすべき神の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 人間に復活するべき神聖・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

### お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、「感想があれば、お聞かせください。」

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（携帯） 090-3346-6619

（メールアドレス） [zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 神という存在

私たちは、「人間と真実の生き方」や「我即神也」「人類即神也」などで、神という概念を当然分かっているものとして扱っていますが、よくよく考えると、神とは何かと問われてはつきり答えることはそんなに容易なことではないのでしょうか。また、私たち人間は進化するに従い、神という概念の捉え方も異なってくるということも、私たちのわずかな経験からも理解できます。

神とはなにか。世間では、いろいろと説明されています。いろいろな説から興味深いと感じたものを紹介します。

神の「カ」は、火を現わし、即ち陽の働きであり、「ミ」は水を現わし、即ち陰の働きであり、神は陰陽の二つの働きを統合して、大調和の世界を創造しようとするのです。

もう一つは、神の「カ」は、隠れて姿が見えないことを現わし、「ミ」は実体を現わしているというもので、私たちの目には見えないが、この宇宙を動かしている実体。どちらの説もそれぞれ説得力があります。

一方神とは、自分がピンチになった時、助けてくれる存在と考える人もいます。この捉え方は、一般的な考えではないでしょうか。

では、五井先生はどのように解説されているか、みてみましょう。『続宗教問答』問90「神様というものを、わかりやすく、誰にでも納得できるように説明するには、どのようにしたらよろしいでしょうか。」の中で、説明されていますものをもとに、整理します。

神様を一口にいえば、生命そのものであり、生命の基ということができる。この生命は、限り無い智慧、限り無い力、限り無い創造力をもっている、人間が小生命であるのに比べて、大生命とも呼ばれています。色々な角度からより詳細に解説されています。

●宇宙の在りとしあらゆるものは、この大生命の心のひびきによって存在しているであって、この大生命の心のひびきの外にあるものは無い。故に神様のことを絶対者ともいう。絶対者はその働きの中に陰陽、プラスとマイナスをもっていて、その陰陽の働きによってものを生みだしてゆく。絶対者が陰陽に分かれて、数限りない存在者、存在物となり、絶対者自身の相（すがた）を、その存在者、存在物の中から仰ぎみるといふことになる。

●分生命（わけいのち）のほうの人間は自分の内部に神を存在せしめて  
いるので、内部の神が、外部の神々と交流しあっていることになる。こ  
の内部の一番奥の神の姿を、直霊といい、その分かれとして存在してい  
るのを分霊といい、直霊、分霊の働きを本心の働きという。そして、こ  
の直霊分霊の働きを真つ直ぐになさしめるために、外面的に働いている  
のが、守護神なのであり、守護霊なのである。

●神様はすべてのすべてであり、人間は神様の子として祖先の悟った霊  
である守護霊と直霊の半面の働きである守護神に守られつづけて、誰で  
も神の子の本体をこの地球界に現わさずにはおれない存在者なのである。

●神様は一つであって多（人間）であり、多がすべて一なる生命を真つ  
直ぐに現わすことができるようになって、神の働きと多なる神の相（す  
がた）とがはっきりわかってくるのである。

●神は大光明であり、その現われはひびきなのである。言（ことば）は  
即ち神なりき、と聖書にあるように、言即ちひびきである。いいかえれ  
ば、律動（リズム）、波動（うねり）ともいえる。

●大神様はすべての力の原動力ではあるが、それは法則として働いておら  
れるので、その法則に外れたままで、神様の力を自分に働きかけてもら  
おうとするなど、法則に外れただけのゆがんだ神様の姿、いわゆる業想念

の姿が神様そのもののような顔をして、その人の前に現われる。そうし  
た誤った消えてゆく姿的の神様をかついでいるのが邪宗教である。

### 人間に現わすべき神の姿

次に人間に現わすべき神の姿について、それが示唆されている『神と  
人間』をもとに整理します。

結論から言えば、それは神の心であり、本来の自己を見出し、それに  
つながる道が、お互いが、お互いのことを思い合う感情、愛であり、行  
為なのであると言われています。

●人間とは肉体だけではないのである。神、即ち宇宙に遍満せる生命が、  
その創造せんとする力が、個々の人格に分けられたもので、しかも横に  
おいて繋ぎ合い、協力し合って、その与えられた力を、縦横に、自由無  
碍に發揮し、形ある世界に完全なる神の姿を画き出そうとしている者で  
ある。神とは宇宙に遍満する生命の原理であり、創造原理であり、人間  
とは神の生命を形ある世界に活動せしめんとする神の子なのである。

●人間は本来、神からきた光である。光は即ち心である。神は、すべて  
のすべてであり、無限の智慧、無限の愛、無限の生命であるけれども、

神そのものが神そのままの姿で動いたとしたら、形の世界にはなにもも現れてこない。無限がそのまま動いたとしても、無限はいつまでも無限であって、有限にはならない。一つがいくら動いてもやはり一つなのである。無限がいくつかの有限になり、一が自己分裂して二つになり、四にならなければ、形の世界は創造されない。この光そのものである神がある時、突然その統一していた光を各種、各様相に異なった光として放射した。この時から神の創造活動は始められたのである。神はまず天地に分かれ、そして、その一部の光は、海霊、山霊、木霊と呼ばれる自然界を創造し、活動せしめ、その一部は動物界を創造し、後の一部の光は直霊とよばれて人間界を創造した。ここにおいて神は、一であり、多であることとなり、一即多神となるのである。

●人間の尊いのは肉体の知識が優れているからでもない。肉体の知識が多いのはよいが、あくまでそれも人間の本性、霊的智慧、いわゆる神智をもとにしていなければ、却って人類を不幸に陥れる。唯物論者の行動が非常に理論的に巧緻でありながら、それを行動に移すと、社会を不穩にし、世界情勢を不安動揺せしめてゆくの、神智によらないからである。即ち人間は一体いかなるものかを知らないからである。( )

●霊・魂・魄として三界に活動している分霊はしだいに肉体人間そのも

のようになってきて、肉体外の六官(直感)直覚(神智)の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものは無いものと思うようになり、人間とは肉体であり、心(精神)とは、肉体の器官が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられぬようになっていった。しかし、分霊と分霊とが本来は神において一つのものであったことが幽体に記録され、記録されているのが意識を超えて思われ、肉体においては、はっきり個々に分かれていながらも、お互いが、お互いのことを思い合う感情、愛は消えることはなかった。この愛の狭い範囲の働きは、親子、夫婦、兄弟の間に、ひろくは、人類、社会の範囲に及ぼされている。愛こそ神へのつながる道であり、光であり、本来の自己を見出すただ一つの感情、行為であった。分霊は物質の世界、形の世界において、己の自身の本来身、光(神)を忘れかけながらも、心の底から湧き上がってくる、人間本来一つの光の理念が、愛の思いやりとなり行為となって、わずかにその光の理念が、愛の思いとなり行為となって、わずかにその光を保っているのである。神の心を愛と呼び、業因の働きを執着と呼び、この二つの心が、人間の生活を、幸と不幸とに分けていくようにしているのである。

## 人間に復活するべき神聖

私達は神聖復活の印により、宇宙神の光をこの地上に降ろし続けていますが、神聖を自分のものとするために、その働きについて、改めて考えてみましょう。

神聖は、前項で整理された神の心であり、それは愛の心と愛の行為に  
よりのたどり着けるものといえます。

神聖の恩恵は、私達が意識しようがしまいが受けているのです。受けていないと思うのは、神聖の働きやそれを自分のものにする方法について理解できていないからです。

神聖（本心）は、私達が何を選択するか、また何に意識を集中するかによって、それらを実現するために瞬時にエネルギーを注いでくれます。良い選択等をすれば、いい結果が実現されまし、一方神のみ心から離れたことを選択等すれば、不調和の姿をそのまま現わします。

即ち前項「神という存在」において整理されているように、大神様は全ての力の原動力ではあるが、それは法則として働いておられるのです。

私達人間は、愛一元の世界から、波動の低く、二元対立の肉体世界を

愛一元の世界にするべく、自分の意識波動を低くして、降りて来ているのです。私達人間は、肉体的には死がありますが、魂的には永遠不滅の存在なのです。自分の意識によって、意識波動を低くしたり、高くしたりすることが自由自在にできる能力をそなえているのです。それが不可能と感ずるのは、霊・魂・魄として三界に活動しているうちに肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものは無いものと思うようになり、その能力を忘れているだけなのです。私達は、世界平和の祈りにより、愛という感情を取り戻し、一筋の究極の光を降ろすこと神事を七年間ほぼ毎月することにより、私達の叡智のチャクラと呼ばれている第六チャクラを開くことが出来、宇宙神の光を直に受けることが出来るようになり、神聖を自分のものとする事が出来たのです。即ち神聖の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していただけるのです。

神聖の働きは、先の例のようにすべて法則として行われているのです。この法則に基づいて働きを理解すれば、宇宙の法則を自分のものとして活用し、地上天国（大調和）実現のために、大きく貢献できるのです。